

ある昼、リボンを添えて

三垂縫衣

「どうか」

これでもちゃんと店員さんに着こなしを教わったの。ヘッドドレスに合う髪型とかも教えてもらった。あ、不器用すぎて自分ではできないから、朝早くに行きつけの美容室に行つてセットしてもらったのだけだね。

彼女は頬を淡く赤らめながら、ふんだんにフリルがあしらわれた、真つ白なロリータ姿で僕の前に現れました。ところどころに真つ赤なリボンがついており、まるでショートケーキのようです。彼女が現れた喫茶店は、一気に華やかになりました。僕は感心してしまつて、しかしそれを表現するための言葉がうまく出てこなくて、しばらく彼女をじつと見つめていました。彼女はそんな僕を不安がり、ちよつと何か言つてほしいよ、と泣きそうな声で言いました。

「ごめん。あまりにもうつくしかったから」

「嘘」

「嘘じゃないよ」

僕は彼女を向かいの席に座らせました。彼女は動作一つ一つに気を遣つていました。しかし、見れば

見るほどうつくしい。僕は彼女が着ているロリータをじっくりと観察しました。布の量が一般的な衣服と比べて圧倒的に多い。このフリルはどのようにして作っているのだろう。赤いリボンは一つ一つ手縫いで付けているのだろうか。これほど大掛かりな衣服を、ファストファッションのように機械化して大量生産するのは、きつと難しいだろう。一体この一着に、どれほどの人が関わつて、どれほどの思いが載せられているのか。そして僕は、長い黒髪をゆるやかな縦ロールにしている、ほんのり頬と目元が赤い彼女を見ました。ああ、彼女とロリータが互いに互いを引き立て合つて調和している。他の女のコが着てもこうはならないだろう。僕は腕を組み、深く頷きました。

「ねえ、どう？」

「すごく似合つてる。うまく言葉にできないのが悔しいくらい」

僕は、改めて感想を求める彼女の目を、まっすぐ見て答えました。彼女はそれを聞いて、ほつと胸を撫で下ろし安堵しました。それから彼女は店員を呼び、僕はウインナーコーヒーを、彼女はカプチーノを注文しました。メニューを持つ、真つ白なレースの手袋で覆われた手は華奢で、普段より一層、割れ物のように繊細に感じられました。

「あのね。自分で決意して着ただけど、やっぱり自信がなかったの」

彼女は自分の髪をくるくる指に巻き付けて、いじり始めました。恥じらっているときの癖です。僕はその愛らしさに頬を緩ませました。先ほどの店員がウインナーコーヒートカプチーノを運んできて、僕たちの前に置きました。彼女はありがとうございませす、と店員に向かって微笑みました。まるでお姫様のようです。それから彼女は慎重にカップを持ち、もう片方の手で優しくカップを包みました。ふうふうと息を吹きかけて冷まします。一口飲むとうつとりとした表情で、おいしい、と目を細めました。西洋のお姫様はこのようにしてお茶会をしていたのでしょうか。彼女の振る舞いを見ていると、ピンクと白の薔薇が咲き誇り、幸せの青い鳥たちが楽しげに歌う、宮殿の中庭にいるかのように感じました。

「けど、どうしていきなりロリータを？」

彼女がロリータをこよなく愛していることは知っていました。そのきっかけは中学生のときに図書室で読んだ小説であることも、事細かに、幾度も聞かされていました。しかし、こうして全身ロリータで着飾ることは初めてでした。彼女にどのような心境の変化があったのか、僕は純粹に気になりました。彼女はカプチーノが入ったカップを置くと、ゆっく

りと語り始めました。店内の蓄音機は優雅なクラシックを流し始めました。彼女の雰囲気はびったりです。

「馬鹿にしないでね？」

「しないよ」

「あのね。夢の中に天使が出てきて、ロリータを着なさいって天啓があったの」

「すごい。ガブリエルに会ったの？」

「いや、ガブリエルさんかはちよつと分からないのだけど……うん。多分そうかも」

それで、今まで勇気がなくて、靴下とか髪飾りとかしか身に付けることができてなかったのだけど、夢の中で天使に背中を押されて、憧れてるだけじゃ駄目。着なきや、って思ったの。それで、先週の土曜日に、今持ってる最高に、とびきり可愛い服で、もちろん靴下はBABY, THE STARS SHINE BRIGHTのオーバーニーソックスで、原宿にある本店まで買いに行ったの。今はオンラインでも買えるんだけど、やっぱり初めてのロリータは現地で買いたかったの。で、君に一番に見てもらおうと思って。あ、今日スミーズに着れるように一度おうちで着てしまったのだけど、だからママはもう見たのだけど、間違いないく、この姿を見せた男のコは君が一番だから。というか、他に見せるような男のコもいないから。

彼女が一生懸命喋る様子を、僕は熱心に見つめていました。彼女の喋り方は、とにかく可愛いのです。以前それを良かれと思って伝えたところ、頭良からってわたしのこと馬鹿にしてるでしょ、と怒られてしまいました。僕は決して、彼女を馬鹿にしているわけではなかったのですが、可愛いという感情は、弱いものを守ってあげたいとか、なんとかしてあげたいとか、自分が相手より上位の存在であると認識したときに生まれる感情でもあるらしく、感情の意図に敏感な彼女が、馬鹿にされたような気分になったのも仕方ないと思いました。それから、彼女に伝えることはせず、可愛い？ と聞かれたときだけ可愛いと言うようにしています。それでも時々、いや頻繁に、わたしに聞かれなくても可愛いと言ってよ、と不機嫌になってしまうこともありましたが、その複雑さもまた、愛おしく感じられるのです。

「それで、ピンクの大きなショッパーを肩に下げて家に帰ったらね、ママが目を丸くしてびっくりして、寝室に走って行ったかと思ったら、自分のクローゼットからロリータを引っ張り出してきたの。わたしそれまで、ママがロリータさんだったなんて一度も聞いたことなかったの。わたしも、ロリータが好きって話をしたことなかったの。だから、なんか

胸がぐわーって熱くなってる。ママと二人で抱きしめ合ったの。運命だねって」

どうやらこれが一番伝えたいことのように、彼女は顔を赤くして、興奮気味に語りました。彼女が語り終え、思い出したようにウインナーコーヒーに口をつけると、少しぬるくなっていました。彼女は興奮を抑えようと深呼吸して、冒頭のようなお姫様モードに切り替えました。取り乱しちやって、ごめん、と眉を下げて笑います。

「これが、ロリータを着た経緯でございます」

「左様でございますか」

緊張がほぐれた彼女は、先ほどよりも自然に、優雅にカップを持ってカプチーノを飲んでいました。

「この後はどこへ行こうか」

「えっとね。本当は今日、東京に行きたかったのだけど、着慣れないロリータで高速バスに乗るのは憚られたの。それに、記念すべき初めてのロリータでのお出かけだから、馴染み深い場所で、大好きな君とご飯を食べたいと思って」

「じゃあ、あそこのオムライス屋さんかな」

僕は最近よく行く、駅南にあるオムライス屋さんを提案しましたが、彼女は首を横に振りました。僕は首を傾げます。

「いや。今日はカレーがいい」

君にも読ませた、わたしの大大好きなの小説を思い出して。彼女はカレーが大好きで、記念すべきロリータデビューの日も、彼とカレーを食べていたでしょう？ わたしもそれに倣ってカレーを食べたいの。大好きな、わたしがロリータを着るきっかけになった小説に出てくる、女のコミたいになりたいの。

彼女は若干怒り気味で言いました。ああ、すっかり忘れていました。こういうとき、僕は素直に謝ります。完全に僕の落ち度であるからです。彼女が大大好きな小説を失念してしまうなんて。帰ったらもう一度読み直す必要があります。

そういうわけで僕たちは、会計を済ませて喫茶店を出、歩いて数分のところにある駅に向かい、駅ビルの五階にあるレストラン街の、お洒落な洋食屋さんを訪れました。一年前の初デートで来たお店です。彼女はここのカレーを、ロリータと同じくらい愛していました。お店はまあまあ混んでいましたが、名前を書いて待っていると、思ったより早めと呼ばれました。

「二名様でお待ちのか藤様」

加藤、というのは僕の名字です。彼女と出かけるときは、いつも僕の名字を書きます。というのも、彼女の名前は「麗木」と書いて「うららぎ」と読む

ものですから、よほどの名字マニアでも読めないのです。彼女は自分の名字を可愛いと気に入っていました。こういうときは非常に不便と、よく顔をしかめていました。よって、家族で外食する時は、お母さんの旧姓を使っていると言います。珍しい名字には、珍しい名字なりの苦悩があるのだと思ったものです。

「こちらの席へどうぞ」

茶髪を清潔にまとめ、柔らかく口角を上げたウエイトレスは僕たちを案内し、座らせてくれました。

それから、うつくしく洗われた、水垢一つないグラスに水を注ぎます。彼女はゆっくりと腰掛け、メニューを開きました。僕も同様に腰掛けました。

「わたしはいつものカレーにするけど、君は？」

「僕はドリアにするよ」

「ドリンクは？」

「アイスコーヒーで」

彼女は向かいのカップルのオーダーを取り終えたウエイトレスを呼び止めました。こういう時、男である僕がウエイトレスを呼び止めて、スマートに注文するのが、あるべき男の姿だと理解していたのですが、頭では分かっているのに、うまく声が出ないのです。初めて会ったときから、彼女の自主性の高さには驚かされていましたし、僕の至らなさを深く

自覚していました。しかし僕たちのこのスタイルは、一年前から変わっていませんでした。彼女は自分が注文するのを全く気にしていない様子でした。以前相談したところ、お会計は君がいつもしてくれてるからいいのに、と不思議そうに首を傾げたのを思い出します。彼女のこだわりポイントがよく分かってはなかりますが、それが読み解けたら、彼女も僕もつまらない思いをするでしょう。互いに分からないところがあるからこそ、人は愛おしいのです。

「以上でお願いします」

注文を終え、ウエイトレスを見送った彼女は、突然くすくすと笑いました。お気に入りの店で、お気に入りのカレーを注文できたことが心底嬉しかったようでした。

「なんだか夢の中にいるみたい。それか、彼の小説の中にいたらしいのに」

彼女はグラスを静かに口元に持っていました。

「ねえ。今度は君のお洋服を買いに行こうよ。君もロリータさんデビューするの」

「いや、僕には似合わないよ」

「ええーっ、そんなことないのに」

えっと、男のこのファッションには明るくなくてごめんなのだけど、彼の小説にいくつか男のこの向けのブランドが書かれていたよね？ 君、鼻がずっと

高いし目も綺麗だし背も高いし脚も長いから、絶対似合う。わたしが言うんだから、間違いないよ。

彼女はハートの形をした真つ赤なショルダーバッグからピンクのカバーがついたスマホを取り出し、これとか似合う、これはちよっと君の雰囲気には合わないな、などと独り言をこぼし、時々僕に服の画像を見せてくれました。しかし、どの服を見てもしっくり来ません。僕はロリータを着てきた彼女の横でも、白いシャツに黒のカーディガン、黒のスラックスに黒の革靴と、当たり障りのない、白黒でシンプルな格好でした。ゆえに、彼女は似合うと言ってくれているが、本当に似合うだろうか、と不安になるのが正直なところでした。

「とにかく、今度東京に行ったときに決めよう」

彼女はそうしよう、と自分で念を押すように頷きました。彼女の、人を振り回す力は天賦の才能そのものでした。しかし僕は、なぜだか全く嫌ではないのです。彼女以外の人間に好き勝手振り回されたら苛立っし、不快ですが、彼女に手を引つ張られてあちこち連れまわされるのは、何よりも嬉しく、幸せなのです。出会った時から今に至るまで、彼女にうんざりすることはありませんでした。

以前彼女とデイズニーに行ったときは、万歩計が驚異の歩数をたたき出していました。僕はスニーカー

―だったから足を痛めずに済みましたが、同じだけ歩いているであろう彼女は厚底のローファーを履いていたため、足がおかしくなってしまうのではないかと心配になったのを思い出します。しかし彼女は、そんなそぶりを少しも見せずに、純粹に、軽快な身のこなしで、デイズニーを満喫していたのです。そんな強さも、好きなのです。

「お待たせいたしました」

ウェイトレスがオレンジジュース、アイスコーヒ―を運んできました。僕がアイスコーヒ―にシロップを一つ、ミルクを一つ入れてかき混ぜたところ、カレーとドリアが運ばれてきました。彼女は目の前に置かれたカレーを、目をきらきらさせて見ていました。それから静かに、いただきますと言って一口食べました。

「最っ高！」

彼女は大満足のようでした。